

以上が金子大尉の証言である。

企画院事務官・岡田芳政氏の証言

当時、企画院事務官であった岡田芳政氏の身分は文官であった。しかし、正確に言えばもともと軍人で、陸軍省から企画院に転出していたのである。

岡田氏は陸士三十六期、山本景蔵著『陸軍贋幣作戦』では岡田氏を次のように紹介している。

「辻政信氏と陸士、陸大とも同期で、辻と並ぶ俊秀と称せられた明朗闊達な人物であった」岡田氏は陸軍大学校を卒業後、参謀本部支那課に配属になり、二年間勤務ののち、駐在員として中国に渡った。昭和十年一月から四月までは北京に、五月から翌十一年二月までは南京に、二月から暮までは広東に駐在した。南京にいた昭和十年の秋には蒋介石の五十歳の誕生日のお祝いが盛大に南京で行われている。昭和十二年一月に日本に帰り、四月から東京帝国大学経済学部に入學した。当時、陸軍から毎年、二、三人が陸軍省軍務課付として東京帝国大学に派遣されて三年間聴講することになっていた。岡田大尉も三年の予定で入學した。しかし、入學早々支那事変が起きたため、東京帝国大学での勉強は打ち切りになり、そのまま軍務課付として企画院転出を命ぜられた。当時、企画院は重要な国策の企画、立案を次々と行い、そのため各省のエリートが転出していた。企画院では中国経済

開発の研究、立案のため第三委員を日比谷公園の旧国会議事堂の建物の中に設け、ここに陸軍省、海軍省、外務省などから一名ずつ転出したが、この時、陸軍省から転出したのが岡田氏である。岡田氏が南京に行ったのはこの時のことで、三十四歳であった。

一年数カ月の企画院転出ののち、昭和十四年三月、参謀本部第八課に戻り、中国に対する謀略に従事することになった。そして、昭和十四年九月には支那派遣軍参謀になり、情報参謀として、ひきつづき謀略工作に従事した。終戦時は大佐、第六方面軍（漢口）の第二（情報）課長であった。

岡田氏は明治三十六年生れで、お話をお聞きした時は八十二歳であった。しかし、きわめて元気で、ほとんど毎日外をかけずりまわっているほどである。何度かお話をお聞きしたが、場所はいつも虎ノ門の霞山クラブである。ここは東亜同文書院出身者のクラブで、その名を東亜同文書院を作った近衛霞山公からとっており、中国と縁の深い場所である。

——支那事変前、南京に一年間ほどいらつしやった訳ですが、その時の南京の様子はどうか。

「私がいた昭和十年から十一年頃の南京は、城内の北半分に新しく政府の建物などが建てられたばかりで、ほとんどの住民は南半分に住んでいました。国民政府の首都といっても、中国の中心地は上海でしたので、政府の部長クラスは週末になると、みんな上海に行き、誰もいなくなってしまう状態でした。上海は華やかで、一方南京には何もありませんから

当然なのでしょう。蒋介石はそれを知って、わざわざ軍官学校の中に自分の住居をつくり、週末でも南京を離れませんでした。汪兆銘や何応欽もそれを見習って南京に住いを建てましたが、そういう建物が原っぱの中にボツンと建っているような有様でした。それでも部長クラスが週末に上海に行くのは続いていたようです」

翌年の南京陥落直後に南京に行っていますが、その目的は何だったのですか。

「上海がわが軍の手中に帰した時、経済復興の必要から、第三委員が上海を視察することになりました。私もその一員として行きました。この時の報告に基き、翌十三年に中支那振興株式会社ができる訳です。」

上海付近の視察が終ったのが十二月二十三日で、すでに南京が陥落していました。ここで、私はかつて駐在員として一年間いた南京を見たいと思い、正月休暇を迎えるので、南京行きを願ったところ許可がおりまして南京に行ったのです」

何日ですか。

「十二月二十四日の午前です。」

海軍省から出向していた佐々木中佐の口ききで、海軍の水士艇で南京に行きました。佐々木中佐の他に他省の希望者も何人かおりました。着いたのは南京の揚子江上で、水上艇にはそのまま待ってもらい、翌二十五日の午後には再び上海に向いました」

南京の様子はどうでした？

「われわれが着いた揚子江には戦死体が十数体浮んでいました。その時の話では、前はず

っとあったが流れてしまったと言っていました。上陸した所に挹江門おさうもんがあり、軍から出迎えるの自動車でこの門から南京に入りました。出迎えてくれた将校の話だと、日本軍は挹江門付近一帯で中国軍を包囲したので最も多くの戦死者を出し、以前は相当死体があったと言っていました。しかし、私が行った時はほとんどありませんでした。

首都飯店にあった軍司令部を訪問し、ここで占領当時の話を聞きました。

参謀本部の支那課の先輩だった佐方（繁木少佐）さんが、南京の特務機関長として着任していると聞きましたので、夕方になって特務機関のあるところに行きました。中山路と中山東路の交わる場所に三階建ての中国銀行があつて、相当荒れていましたが、佐方さんはこの二階を使っていました。軍司令部から日本酒が届いていましたのでローソクを立て、二人でちびちび飲みながら夜半過ぎまで語りました。この日はクリスマス・イブで、あとで、この日佐方さんのお子さんが亡くなったというのを聞きました。

翌日は佐方さんの案内で南京城内を自動車で一巡しました。激戦のあつた光華門や中華門にも行きました。中華門の方では中国人の露店が二、三開いていました。その後、戦場にもなった北部を見てまわりましたが、日本兵や一般日本人、おそらく新聞社の人々だと思いますが歩いているのが見えました。火災で焼けた家も何軒もあり、城内では一軒ほどくすぶっている家があつたと記憶しています。

以前私が住んでいた家に行ってみると、昔のままで、付近はのどかな風景で戦場であつたという名残りは少しもありませんでした。そばの金陵大学にはたくさん避難民がおり

ましたが、すこぶる穏やかで、顔見知りの門番の中国人がニコニコして迎えてくれました」

「難民のいる場所は自由に出入りができなかったのではありませんか。」
「特別止められたりはしませんでした。門番が顔見知りだから入れたのかもしれません」

「虐殺があったと言われていますが、そのほかに死体など見てませんか。」
「揚子江岸と挹江門外で十数箇の死体を見ただけです。市内を見て廻った時、戦死体は一体も見ておりません。街は平靜そのものでした。戦死体などのかたづけは終わったあとだと思えます。」

それにしても日本軍が南京に入ったのは十三日で、その日はまだ戦闘があったと言います。私が南京に行ったのはその十日後です。その間、どの位の死体をかたづけることができますか。あつたとしても何百体とか何千体だと思います。紅卍字会が埋葬したという何万という死体もどういうものか。疑わしいですよ」

その後、岡田さんは中国で謀略などをやっていたので、中国人と接触する機会があったと思いますが、南京で虐殺があったということを聞いたことはございませんか。

「ありません。ただの一度もありません。はじめて聞いたのは戦後になってからです。聞いてびっくりしました。」

私はずっと中国にいて中国人というものをよく知っていますし、陥落前の南京も陥落後の南京もよく見てますから言えますが、南京事件とは中国の宣伝です。戦後、いちはやく中国が、裁判で何十万人が殺されたと言って、それが世界に伝わりました。それが南京事件というものです。その時、世界に与えた印象はあまりにも強かったもので、これは簡単に消えるものでありません。南京事件というのは、中国がそれまでやってきた宣伝戦を戦後に行なったまでのことです。

中国は宣伝がうまい国ですし、日本人には理解できませんが、白髪三千丈の国中国ではこういうことは当然なことなのです。日本は宣伝戦に負けたのです。

当時から中国の正確な人口はわからないし、誰が兵隊かもわかりませんから、正確な数は数えられません。ですから、日本側がいくら部隊の動きや、一部戦場の思い出話を集めてもこの大宣伝を否定することは不可能です。それに、中国人というのは面子を重んずる国ですから、いったん言ったことを取消すことは絶対ありません。ですから、いまのままいくら争っても南京事件は永久に片が付きません」

南京事件の真相をはっきりさせる方法はないのでしょうか。

「宣伝に負けたとあっさり兜を脱ぐことです。それしかありません。数字の討論は愚の骨張です」

以上が岡田芳政氏のお話である。私が岡田氏から聞いたことは南京のことであつたが、会って話を聞くと、いつも現在の日中友好の話になる。岡田氏の頭の中にはいかにしたら日中が友好を保てるかしかないようで、ここに記した話をまとめるまで三回会い、五回手紙をいただき、電話は度々必要だった。それほどいつも日中友好の話になる。

当時、中国攻略の謀略担当の一人として、多くの軍事機密費を使い、組織を動かすこと

の出来たであろう岡田氏が、今、同じ中国のことについて徒手空拳でむなしい思いをしているのが私にもわかる。当時から中国と深いかわりを持ち、今なお中国問題で飛び廻っている岡田氏であった。

参謀本部庶務課長・諫山春樹大佐の証言

昭和十二年九月の上海派遣軍上陸以降、打合せ、視察などのため、度々、軍中央部から現地軍に派遣があった。

昭和十二年十二月の暮には参謀本部庶務課長の諫山春樹大佐が上海に向い、元旦に南京に行った。この時、陸軍省人事局長阿南惟幾少将、補任課高級課員額田担中佐、軍事課高級課員稲田正純中佐、参謀本部作戰課員荒尾興功少佐らと一緒にであった。健在なのは諫山氏一人である。そこで諫山氏に軍中央部は現地軍や南京をどう見ていたのかをおたずねした。昭和六十二年九月のことである。

——昭和十二年の参謀本部庶務課の記録によりますと「十二月二十六日、課長諫山大佐は人事及幕僚業務等に関し各軍及師団司令部と連絡の爲中支那方面に出張す」とありますが、この出張は具体的にどういうことですか。

「現地軍の状況がどういふものか、軍と師団との関係はうまくいっているかなど視察す

るためです」

——軍紀が乱れて、そのためということは、ありませんか。

「そういうことではありません。軍の状況を把握するためです。参謀などの働きを知るためで、深い意味はありません。よくあることです」

——阿南人事局長や額田人事局高級課員も一緒に……。

「もともと参謀の人事は参謀本部の庶務課がやり、そのほかの人事は陸軍省人事局でやることになっていました。ところが昭和十一年の二・二六事件後、すべての人事を人事局がやることになって、参謀の人事は参謀本部庶務課が原案を作り、人事局に了解してもらったうえで、最終的に決定することになりました。そういうことで庶務課長は陸軍省人事局とは関係があるのです。ただし、阿南人事局長とは一緒にしたが、額田君の記憶はありません」

——南京にも行かれたのですか。

「元旦頃行きました。市内の各所を視察しましたが女の死体の一つ見たくらいでした。

それでも塚田攻参謀長が松井（石根）軍司令官が暴行について非常に心配しているとおっしゃいました。ただし、具体的にでなく、また虐殺事件を思わせる様な文句でもなく、そのため、その時はショックをうけた事もなく、漠然なる気持で過ぎていました。現在言われているような虐殺ということではなく、一緒に行った人も虐殺というようなことを質問したということはありませんでした」

—それは軍司令部内でのことです。

「上海の飯店のようなどころでの話だったと思います。塚田参謀長はまじめな方で、深刻になってました」

—松井大将ともお会いになりましたか。

「軍司令官とは軍司令部で簡単に挨拶した程度でした」

—松井大将はどのような方ですか。

「私が陸大をおえて参謀本部の第二部所属となった時の部長で、それから何度か接しています。その時は建川（美次大佐）さんが課長で、建川さんは奔放な方でしたが松井さんの下でしたから格別な事も見当りませんでした」

松井さんは第一次世界大戦の時、従軍武官として欧州の戦場におり、当時の活躍よりは凄かったと言われていました。第二部長のあとジュネーブ軍縮会議の全権でパリに来てまして、私はパリにいましたのでお世話しています。

上海では老練大人の風の感じを持ちました」

—上海の軍の特務部には諫山さんと同期の木村松次郎（大佐）さんが宣伝班長としていましたか……。

「会ってません」

—昭和十三年一月四日に参謀総長より軍紀風紀の乱れに対し訓示が出て、一月九日に塚田（亥）中支那方面軍参謀長より麾下軍に通牒が出ていますが……。

「記憶にないのです」

—参謀本部にいて、現地軍の軍紀が悪かったとか話題になっていませんか。

「そういうことはありません」

—南京事件について、箝口令がしかれていたということは。

「参謀本部で受付ける報告は毎日の電報などを含めて庶務課が受付け、主務課に渡す分と関係課に渡す分を同時にガリ版で刷り、これを配布します。すべて私が目を通しますから私が知らないということはありません。昭和十四年三月まで庶務課長をやってましたが、その間虐殺事件が話題になったことも、箝口令をしたことも絶対ありません」

—七月に蘆溝橋事件が起きた時の参謀本部の様子というものはどうでした？

「作戦部長の石原（莞爾少将）さんは不拡大方針でしたが、全体として不拡大主義は四面楚歌でした」

—支那課が簡単に支那を一撃できると言っていた様でしたが……。

「さあ。直接タッチしていませんからわかりません」

—昭和十三年一月にアメリカから、日本軍が南京のアメリカの権益を侵しているとの抗議があり、本間雅晴第二部長が下志津飛行学校教官をやっていた広田豊中佐とともに南京に行っていますか。

「アメリカなどから当時抗議があった事は言われているとぼんやりと思ひ出されるのですが、本間さんの出張は全く記憶にありません。本間さんが第二部長として出張するのに部

下を伴わず、広田中佐を同行させた事も異例と思われます。広田は陸士の同期です」
 ——第十六師団長の中島今朝吾中将の日記に「捕虜はせぬ方針なれば」とありますが、どんな意味なのでしょうか。

「武器をとりあげて釈放せよ、ということでしょう。捕虜は釈放するということなのですが、そのまま釈放すればまた敵となりますから武器を取り上げます」

——捕虜に対して諫山さんはどのような考えをお持ちでしたか。

「特に関心はありませんでした。日本人は捕虜にならないという考えがあったので捕虜について特別考えてなかったと思います。私自身、昭和十四年三月、大同にある第二十六師団の連隊長として行きましたが、捕虜はあまりいなかったと記憶しています。また、捕虜なのかどうか、中国人を使役として使っていました。私は前の連隊長のやったとおり行なうという考えでした」

——当時南京事件は全然言われていなかったのですね。

「事件ということは全然知りませんでした。敗戦の時、私は台湾軍の参謀長をやっていて、引揚げが終わった時B—29搭乗員処刑の件でアメリカの裁判にかけられ、終身刑となりました。それで上海にいて後で巣鴨にかかりました。ですからその頃南京事件が話題になっていたことは知りませんでした。最近言われてから知るようになりました」

——以上が諫山氏の証言である。

諫山氏には昭和六十年から度々当時の中央の軍の考え方について手紙で教えてもらって

いた。そのことを昭和六十二年に『聞き書 南京事件』を刊行した際、簡単に記した。ところが本が発刊された直後、軍全体のことでしたらお話しできますという手紙をいただき、そこではじめてお目にかかった。それまでは南京事件には何ら資料を持たないので証言はできないということでお会いできなかったのであるが、お目にかかると、軍の中央部のことと南京出張については知る限り話して下さった。南京に行ったのは四十三歳の時であり、話をうかがったのは五十年後で、諫山氏は九十三歳であった。諫山氏は温厚な方として知られているが、お目にかかると、いかにもそうだということがわかる。

昭和八年、諫山氏はフランスから帰って参謀本部の第二部に配属になった。少佐ながら庶務課高級部員をつとめた。昭和十年八月に福岡の連隊に出たが、一年後に再び高級部員として庶務課に戻った。公正、温厚な人で、人事をつかさどるに余人にかえがたいということからであった。昭和十二年十一月には庶務課長となり昭和十四年三月までつとめた。

陸軍省軍務局軍事課編制班・大槻章少佐の証言

大槻章氏は、陸軍省軍務局軍事課の課員として、陥落直後の南京に行っている。

当時少佐。前年の昭和十一年に陸軍省副官から軍務局軍事課に異動となり、編制班に所属する。それから昭和十六年の戦争勃発までの六年間、中支那派遣軍の参謀として出た以外、ずっと編制班にいて昭和十五年からは編制班長をつとめる。昭和十六年暮に南方軍参

謀として転出し、第十四軍の参謀などをへて終戦時は内地の第三十六軍高級参謀。

この話は、平成に入ってから東京・八王子の大槻氏の自宅でうかがったものである。

— どのような立場で南京にいらしたのですか。

「軍事課の課員は、軍情を知ることと出張に行くことがあるんです。内地を見てまわることもあるし、支那に行くこともある。それで昭和十二年の暮に南京に行くことになったんです。南京の視察ですな」

— 暮といえば、陸軍省の阿南（惟幾）人事局長が課員たちをつれて南京に行っていますか、それと一緒にですか？

「いや、違います。ひとりです。そのときは南京と杭州に行き、いったん東京にもどり、それから北支にも行つてます」

— 南京ではどこに？

「昔のことなんではつきり覚えていないんですが、兵站旅館に泊まりました。寝ようとしたら、寝台はあるんですが、寝台といつても鉄の枠だけで、藁布団もない。仕方なく毛布一枚で寝ましたが、寒くて寒くて、それが一番印象的でした」

— 虐殺があつたと言われていますが、何か聞いたたり見たりしたことがありますか？

「そういった形跡は全然ありませんでした。何もなし。軍司令部の参謀といろんな話をしたんですが、話題になったことも、聞いたこともなし。虐殺があつたというのは嘘ですな。

そのあと私は杭州に行き、第十軍司令部にも行きました。杭州に行ったとたん大雪にな

り、交通機関は何も動かなくなつた。飛行機を飛ばすこともできず、司令部にとじこめられてしまつたんです。司令部の参謀も動きがとれなかつたと思います。

その第十軍に山崎正男（少佐）さんが作戦の参謀としておつた。私にとつて山崎さんは、同郷の先輩で、幼年学校から知つているんです。しかも山崎さんは軍事課にいて制度の担当をしておつた。その後任として私が行つたという関係なんです。そんなことで山崎さんとはいろんな話をしました。しかし、虐殺なんてまったく話題にならなかつた」

— ほかの参謀から聞いたことなどは？

「杭州には一週間から十日ほど閉じこめられていたから、参謀とはくだらんことを話し合つていた。何もすることないからね。寺田（雅雄中佐）さんもいて話をしたおぼえがある。谷田（勇大佐）さんや吉永（朴中佐）さんもいた。誰からも何も聞いていない」

— 虐殺はなかつた？

「虐殺があつたというのは、嘘ばかり。翌年の昭和十三年になって、私は中支那派遣軍の参謀として南京に行くんですが、そこでも全く聞いていない。虐殺なんというのは命令がなければできないことです。戦後言われているような虐殺があつたなら、参謀として南京に行つたとき、話題になつていないでしょう。あの話は問題になりませんな」

— あつたとしたら、そのとき聞いているということですか？

「そうです。南京を攻略したときの松井（石根）司令官のあとには畑（俊六）大将です。私は畑大将と、中支那派遣軍で一緒、そのあと陸軍省の軍事課に戻つたときの大臣。さらに昭

和十八年に南京の近くの旅団参謀になったとき総軍の司令官でした。畑大将とはざつぱらんな話をするんですが、一度も聞いたことがありませんでした。あれは全くの嘘です」
 以上が大槻少佐の証言である。

野砲兵第二十二連隊長・三国直福大佐の証言

三国直福氏は明治二十六年生れで、話をうかがった時は九十二歳である。八十五歳まで東京で会社勤めをしていたというほどの元気な方で、しかも、七十九歳で奥様を亡くしてからは一人でやってきた。八十五歳になり、ようやく仕事を離れ、御子息のいる千葉県に移っている。話をうかがったのはこのご自宅であつた。お年ではあるが、顔つやはよく、健康である。足は弱っているのであまり外出することはなく、東京に行くような時は車で行くという。三度おうかがいして、三回とも二時間ほど話をおうかがいしたが、その間、三国氏は座布団に座り、背すじをきちつと伸ばしたままである。年令が半分もいかない私が途中膝を崩したりするが、三国氏は疲れた様子を少しも見せない。終わってから感心した次第であるが、同時に、二時間も三国氏にそうさせた自分に冷汗が出た。

三国氏は記憶力もよく、南京の頃の出来事は月日まで覚えており、また、陸軍省新聞班に長くいたことから、情報・マスコミに対し今なお旺盛な知識欲があり、現在の情勢にも詳しくあつた。私がたずねたいことを前もって承知していたこともあるが、積極的に詳しく

話して下さつた。

野砲兵第二十二連隊長をつとめたあと、第十五師団参謀長、南京特務機関長を経て、大東亜戦争開始時には陸軍省調査部長として東条首相の政治情報スタッフをつとめた。終戦は第二十一師団長としてハノイで迎えている。

——南京に昭和十三年一月に行きましたね。

「一月十五日に行き、二十二日までいました。一月十五日は夕方に着きまして、二十二日は朝から順次船に乗りましたので、南京にいたのは実質六日間です。

私が師団司令部に帰任の挨拶に行つたのは翌日です。師団司令部は立派な国民政府の建物の中にあつまして、師団長に病気で休んだお詫びを申し上げました」

——その時、師団司令部で、軍紀の乱れとかあるいは南京事件のことで何かお聞きになってませんか。

「話は何もありませんでした。師団長に会つたあと、参謀長に挨拶しましたが、参謀長からも何も聞いてません。私が帰任した時、第十六師団は再び北支へ行くことが決まつてましたので、二、三日してから、私の連隊に対する師団長の巡視がありました。半日か一日かかり、その時も師団長とはいろいろ話をしましたが、何も聞いてません」

——第二十二連隊の部下の方からはお聞きになつてませんか。

「例年ですと十二月に将校の考課表を書くのですが、入院しましたものですから、南京に

行つてから、南京の戦闘ぶりとか、そのほかいろんなことを聞きました。ですから部下からいろいろ報告がありました。が、事件ということは何も聞いてません」

——旅団長や他の連隊長などから軍紀などで話はありませんでしたか。

「師団長、参謀長とは話す機会があつても、他の連隊長、旅団長と話す機会はほとんどありません。軍とはそういうものです。」

第十六師団は昭和十二年八月に動員され、私は昭和十三年七月まで第十六師団にいましたが、戦場にいる間、野田謙吾さん(第三十三連隊長)、助川さん(第三十八連隊長)とは一度も会つたことがありませんでした。野田さんは私より一期上で、途中、私と同期の山田喜藏と代つてます。片桐護郎さん(第九連隊長)とは一緒になることが多かつたのですが、それでも会つて話したというのは二、三回です。それと第二十連隊の大野宣明さんとも会つた記憶はありません。

旅団長とも大体同じで、佐々木到一(第三十旅団長)さんとは一度くらい、草場辰巳(第九旅団長)さんとは多かつたのですが、それでも二、三回といったものです。もちろん南京事件ということは聞いたこともありませんでした」

——師団全体の動向はどなたが一番把握しているのでしょうか。

「参謀長でしょう。中沢(三夫大佐)さんです。第十六師団は南京のあと、再び北支に行き、徐州近くで二十九日間連続戦闘ということがありまして、各連隊からは毎日、前日の夜、副官が命令受領に参謀長のところに行きます。師団長名の命令をもらう訳です。この時、實際命令は参謀長が渡します。このようなことから、参謀長が師団のことは一番知つていたと思います。中沢三夫さんとは京都にいる頃、深草で一軒おいて住んでいました。が、おとなしい人です」

——一月十五日に南京に着いた時、街の様子はどうでしたか？

「戦場ですからそういうものと思つて見てました。惨憺たるもので、何もなかつたですね。ただ、私は、ようやく部隊に追いついたので、気持は明るかつたことを覚えています」

——その時、死体などはまだ街にありましたか。

「あつたかもしれませんが、見てません。観察するというような余裕がありませんでしたから」

——南京市内をよくご覧になってますか。

「ええ。部下の戦跡を見て廻りましたから。中山陵では観測係の将校から説明を受け、二、三日見て廻りました。しかし、虐殺というような死体は見えてません」

——二十二日に再び北支に行く時、下関から出発したと思いますが、その時、下関の様子はどうでしたか？

「特別印象になるようなことは残ってません」

——そうすると、当時の第十六師団の幹部の間で、南京事件については何も話がなかつたのですかね？

「そうです。上の方だけでなく、下の方からもそういう話は聞いてません。私自身見てま

せんしね。

私は再び北支に行つて戦つてゐる途中、名古屋の第十五師団の参謀長を命ぜられましたので、昭和十三年七月に名古屋に行きましたところ、この師団が江寧の警備にあたることになり、八月にはまた南京に戻ってきました。この時も虐殺があつたという話は聞いてません。もう日本人の商人もたくさん来てまして、長崎県人が多く、長崎県南京市などと言つてた頃です。もちろん、軍に対して苦情を言う雰囲気ではなかつたかもしれませんが、南京の街は朗らかでした。

その後、私は第十五師団参謀長として昭和十四年八月一日まで南京にいまして、それから南京特務機関長になつたので、さらに十五年の五月まで南京にとどまることになりました。特務機関長という、今までの軍と全く違つて、毎日、中国人と接触、交渉があり、中国の立場に立つて考えなければなりません。ですから町の人も親しく話しましたが、その時も、中国人からそんな話を聞いた記憶はありませんでした。

維新政府の行政院長の梁鴻志氏ともひんぱんに会つてますが、彼から聞いたこともありません。梁鴻志氏は文人で、書いてくれた書は今も持っています」

——南京特務機関長というと、大西（二）少佐が特務機関長をやっていますが……。

「大西君のあととは秋山義隆（大佐）さんがやつて、そのあとが私です」

——その頃、南京市長の高冠吾氏が、南京郊外に無縁仏が三千ほどあつたので埋葬して碑を建てた、と言われてます。

「そうですね、それは知りませんでした。高冠吾氏は酒の強い人で、よく会つてましたが、うらみことを聞いたことはありませんでした」

——中島師団長はいろいろ言われていますが、どのような方ですか。

「一言で言えば、戦に熱心で、上手な人です。砲兵の大家でして、私は悪い感じは全然ありませんでした。閣下とは何度か一緒でして、昭和八年私が第十六師団の第二十二連隊付中佐になつた時、中島閣下が舞鶴要塞司令官をやつてました。舞鶴要塞司令官は第十六師団の隷下にありましたので、何度か一緒になつたことがあります。演習の時、田舎の宿屋と一緒に二、三日泊つたこともありました。」

二・二六事件の時、私は戒嚴司令部の参謀で、この後、中島閣下は憲兵司令官になりました。その時、宇垣首班阻止に中島さんが行つてます。あまりにも有名な話ですが、たまたま中島さんがその役をやらされたということだと思います。

私はこの年の十二月に第二十二連隊長になつて行き、翌十二年八月になつて中島さんが師団長として来ました。中島師団長をお迎えした時、野砲兵連隊のことをいろいろ聞かれました。私は連隊長として赴任して八カ月でしたが、それを聞いて、『まだ八カ月か、何もわかつたらんだらう、心配するな俺が教えてやる』とおっしゃつてました。

一カ月もしないうちに饗庭野で連隊の射撃演習があり、あす師団長の視察があるという日の晩、動員命令がありました。急遽、演習をとりやめにして、私は一足先に師団司令部に戻りました。八月二十五日の午前三時頃だと思ひます。その時いらした師団長が『砲兵、

心配するな」とおっしゃいました。それが印象的です。

戦場に行っても熱心で、北支では第一線まで来たのにはびっくりしました。その時、私は射撃は中隊長にすべて任せていましたのですが、師団長は中隊長に向つて『射表を出せ』といつて、いろいろ注意したりたずねたりしました。たまたまその中隊長は砲兵学校に行つてきたばかりの人だったので、師団長の質問にすべて答えることができて私は助かりました。

北支から中支へ向う時もちょっと休みがありましたら、師団長から射撃演習をやるようにといつてきました。師団長臨場のもとに十二中隊全部展開してやったこともあります。

中島師団長は砲兵のエキスパートとして有名でしたが、とにかく熱心な方でした。

南京攻略の時も前線の砲兵陣地に行つて、負傷しておられます。

私が南京に帰任したのは南京攻略戦が終わった後でしたが、『二十二連隊は射撃が下手だ』とお叱りを受けました。砲兵の大家ですからすべてがわかるのでしょう。

作戦にうるさいので、歩兵連隊長で不平を言う人もいたようですが、よくいえば、気のつく人、悪くいえば、やかましい人と言えるかと思います。

一面、涙もろい面もありまして、北支の順徳で、私の連隊の兵に來た手紙をその上官からみせてもらったことがあります。母親からの手紙ですから子供のことばかり書いてあります。それを師団長に見せましたところ、ポロポロ涙を流してました。

また、台児莊の戦いの時は、輜重隊が馬をやられて困つてますと、わざわざ師団長が私

のところに来て、砲兵の馬をまわしてくれないかと言われました。私の方の馬は砲弾も少なくなったので六頭でひいている馬を四頭に減らして、何頭かやりました。しばらくしてから、輜重隊が非常に喜んでいて、と師団長が言いに來ました。

私自身のことも、痔が悪かったのですが、演習に行つた時も親身になつて心配してくれました。徐州の戦いのあと通信筒が投下され、そこには第十五師団參謀長を命ず、とありました。そこで戦いが一段落した後、離任の挨拶に行きますと『三国君は理の人より情の人だね』と言われましたが、私は師団長こそ情の人だと思いました。

——同じ砲兵ということで注文も多かった代わり、話が合うこともあったのでしょね。

「それもあります、もともと軍では、砲・工兵連隊長は師団長のそばにいる決まりになつていました。実際、第十六師団では旅団長とか歩兵連隊長は遠くにいて無線連絡というような状況でした。ですから私はよく一緒にいました。私が一番そばにいたと思います。

參謀長は命令起案などがあつて忙しく、師団長は一人でいることが多いので、よく話し相手というか接待役をやりました。そのことで中沢參謀長からは、徳とする、と言われました。また、師団長の身の回りの世話をする高級副官が私の同期生で、それにも、おまえがいたから助かったよ、とよく言われました」

——松井大將が南京での中島師団長の統帥について非難していますが……。

「中島中将は今申しましたように戦に熱心な人でした。それが戦に重心をおいたやり方になつたと思います。また、師団長といつても、こまごまと自分でやる人でしたから、すべ

てが中島師団長だ、となったと思います。

これは一般論ですが、私が陸軍士官学校を卒業する大正二年頃は「糧は敵に求む」とか『捕虜は適当な数だけ』と言ってましたから、そういう考えが全然なかったとは言えないと思います」

——南京の警備司令官をやっていた佐々木旅団長はどんな方ですか。

「知っておられるとおり、軍の支那通です。私が佐々木さんと初めて会ったのは、昭和三年、済南事件が起きた時です。済南で第六師団と蒋介石の北伐軍が衝突しました。私は陸軍省の新聞班にいたのですが、急遽、第六師団に行くことを命ぜられてまいりました。この時、南京にいた佐々木中佐は蒋介石と一緒に済南にきました。当時、佐々木中佐は蒋介石と親しく、顧問として南京にいた訳です。それが昭和十二年には蒋介石を攻める立場で南京に來た訳です。その心境はいかばかりだったか。

第十六師団にいた時、私は佐々木旅団長とはあまり話す機会がありませんでした」

——松井大將が東京裁判で南京事件のため死刑になりますが……。

私は終戦時にハノイにおりまして、船に乗って出発という時に米軍将校により船から降ろされ、穴戸參謀長と一緒に広東に連れていかれ、戦犯に指定されました。この時の裁判というのが目茶苦茶で、私の罪状が、汪偽政権を作った、私の兵が市民に乱暴をしたというのです。確かに汪政権ができた時は南京特務機關長でしたが、深くかわってません。

兵の乱暴についても私の師団は戦犯もあまりなく、軍紀については強く言っていましたのできちんとしてました。軍紀がしっかりしていたので支隊に賞詞を与えたくらいです。ですから市民に乱暴したと言われた時、証拠を見せてほしいと言ったくらいです。そうすると綴りを持つてきました。見ると、証拠というものは、中国軍が市民に被害を出せと命令して出させたものなのです。綴りにはその命令まで書いてあります。しかも、そこに書いてあることは旧暦で、場所も日も師団のいたところとほとんど合わないのです。中国の証拠とはこういうものでした。

また、裁判を開いても、検察官も弁護士もいないこともありましたが。ある人の死刑の判決文には、容貌魁偉、とあったそうですが、判決に容貌は関係がないと思います。

私も、周りの噂では死刑だということでしたが、それに構わず黙っていないで全部反論しました。私の裁判は最後の方でしたが、それまで将官の死刑が多すぎたというので、私の前の人から無期徒刑になり、結局、私も無期徒刑になりました。それで広東の監獄に二年、上海監獄に移されて一年半、さらに二十七年までの三年半果嶋に入っていました。

戦後、中国が行なった戦犯裁判というものはそんな類のものだったと思います」

——南京事件を知ったのはいつですか。

「果嶋から出てきてからです。ただ松井大將が死刑になったというのは、上海の監獄で聞いたと思います。中国の新聞があり、支那語のわかる人が読んでくれましたから」

以上が三国氏の証言である。